

# 前期作田における政治社会学

——市民社会論・大衆社会論の批判的摂取に着目して——

東京女子大学 流王貴義

## 1 目的

本報告の目的は、作田啓一（1922-2016）が1960年代から70年代前半にかけて発表した研究・論考の意義を、政治社会学という視点から検討することである。近年、「日本の社会学を振り返り」、「日本社会学の固有の成果」を明らかにするとの問題意識の下、作田をはじめとする戦後の日本の社会学者の業績に対する関心が高まり、研究の蓄積が始まっている（奥村 2016：17）。本報告が対象とする前期作田の研究・論考は、日本の社会学者による固有の成果として理解しうる恰好の素材である。例えば作田は「価値体系の戦前と戦後」「恥と羞恥」といった研究のなかで、ベネディクトやベラーといった外国の学者による日本社会論を、日本社会の実情と照らし合わせながら批判的に検討するだけでなく、羞恥といった新たな概念の提唱を通じて、そのような日本社会論を相対化しうる普遍的な理論枠組みの提示を試みている（作田 [1972]：249-33）。では、日本の近代社会の「価値体系の特質」や羞恥という罪でも恥でもない「第三の意識」に関する作田の考察は、具体的にはどのような理論枠組みによって支えられていたのか（作田 [1972]：249, 298）。本報告では、価値や文化、意識をめぐるこの時期の作田の研究・論考の理解には、国家と集団、個人をめぐる政治社会学的考察との関連付けが有意義である点を示したい。

## 2 方法

上記の目的を達成するため、本報告では『価値の社会学』に収められている作田のテキストを中心として検討を行う。特にデュルケムやリースマンなどの他の社会学者、加えて丸山眞男をはじめとする他の学問の研究者による市民社会論・大衆社会論の批判的摂取に着目する。

## 3 結果

価値や文化、意識をめぐるこの時期の作田の研究・論考と国家と集団、個人をめぐる政治社会学的考察との結節点となっているのは、「集団の自立性—メンバーの心理的な安定—強い自我という三者の関係」に留意する作田の着眼である（作田 [1972]：308）。この着眼の背景となっているのが、作田によるデュルケムの『社会学講義』とリースマンの『孤独な群衆』、丸山眞男の『日本の思想』の批判的摂取なのである。

## 4 結論

政治社会学という視点から、1960年代から70年代前半にかけての作田啓一の研究・論考を検討するならば、同時代の市民社会論・大衆社会論の展開における1つの方向性としてその意義を理解することができる。主体や自己の確立を直接的に追求するのではなく、「個人や集団が、相互に連結しているパターン」である「社会構造」に着目し、安定した個人を支える社会的基盤の検討を試みる作田の探求は、デュルケムの近代社会構想の現代的意義を探る1つの可能性として位置付けられるのである（作田 [1972]：222-3, 239）。

### [文献]

奥村隆（編）、2016、『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文堂。  
作田啓一、[1972] 2001、『価値の社会学』岩波書店。